茶山 健太（Sayama Kenta）
2020～2022 年度奨学生
オックスフォード大学 地理・環境学部　博士課程

私は今年の夏、新型コロナウイルスの拡大による度重なる延期を乗り越え、初めてのフィールドワークに赴くことできました。そして、フィールドワークを行うとともに、オマーンの内陸部にある小さな街、マナフにある語学学校に 7 週間通い、アラビア語とオマーン、そしてアラビア半島の文化について学びました。アラビア語学習と博士課程の論文執筆の両立をするため、毎日朝8時から夜12時ごろまで勉強を続けるかなりハードな期間でしたが、非常に実りの多い期間になったと感じています。今回のレポートでは、私の学びを紹介すると共に、少しオマーンでの生活について語らせていただければと思います。

初めに、私がなぜアラビア語の勉強をしているのかについて少し話をさせていただければと思います。私は、南東アラビアでの大地の遺産の保全というテーマで現在博士課程の研究に取り組んでいますが、この研究を行うのにアラビア語が不可欠かというと、実はそうではありません。私が研究で関わりを持っている UAE とオマーンの大学の先生や博物館のスタッフ、政府の担当者などのほとんどは流暢に英語を喋ることができる人ばかりで、アラビア語を使う必要はほとんどありません。しかし、遺産の保全という分野に関わっている以上、この地域の人々の文化、風習、そして思考を理解することが必要な訳で、言語という人々の暮らしの根本をなす要素の理解なしに深い理解を得ることはできないだろうという考えと、ブラジルにて生活をしていた際に、ポルトガル語を喋ることができたことによって多くの関係を築くことができたという成功体験の二つの要素を鑑みて、博士課程が始まって以降、継続してアラビア語を学び続けてきました。しかし、大学で開講されている週二時間の授業だけでは、世界的にも難しい言語の一つとされているアラビア語を学習するためにはどうしても不十分であったため、今回語学学校に通うことに踏み切りました。

私は、以前話させていただいた通り、出会った教授との会話の中で現在取り組んでいる、という博士課程の研究テーマに辿り着いた経緯があり、昔からこの地域に特に興味があったわけではありませんでした。特にオマーンは、アブダビやドバイなど著名な都市があり、メディアから取り上げられることが多い UAE とは異なり、実を言うと研究テーマとして取り上げるまでは、サッカーの国際大会のアジア予選でよく当たるチームというぐらいの認識しかありませんでした。そのため、今回の滞在は、自分が研究を行っている国をより深く理解するという意味でも、非常に大きな意義があったものだと考えています。

オマーンに滞在して一番の驚きだったのは治安の良さです。オマーンはアラビア半島の中でも一番と呼ばれるほど治安が良く、夜に街中を歩いていても、全くと言っていいほど、危険を感じることはありませんでした。むしろ、好奇心旺盛で親切な人が多く、特にアラビア語で話しかけると、アラビア語が少し話せるこ

とに驚いたのちに、「うちにコーヒーを飲みに来い。」と言ってくれたり、何度も断っているのにも関わらずペットボトルの水をくれたりと、若干強引ではありますが、人々の気前の良さと優しさを感じる機会が多くありました。語学学校の先生たちも、生徒として私を扱うだけでなく、友人として迎え入れてくれ、そのうちの何人かとは、いまだにソーシャルメディアなどを通じて関わりを続けています。

文化的には、敬虔なイスラム国家ということもあり、アザーンと呼ばれる礼拝への呼びかけが毎日モスクから聞こえる生活を送りました。学校のイベントで観光や文化体験をする際にも礼拝のためバスを停めてモスク休憩(?)を行うことが当たり前でしたし、酒類は禁止され、豚肉もどこを探しても見つからないというような日々でした。二ヶ月の禁酒生活の後に、パブ文化が根強く、ワインやビールが提供されるイベントが多いオックスフォードに戻ってすぐの際には、グラス一杯のワインで予想以上に酔ってしまい若干恥ずかしい思いをしたのもいい思い出です。

大地の遺産という視点から振り返ると、今まで本で読んだり、写真で見たりするだけであったさまざまな珍しい地形を実際に見ることができ、非常に感激しました。中東というと砂漠をイメージする方が多いかと思いますが、オマーンには、美しい渓谷や山が多くあり、その多様性には驚かされるばかりでした。特に、アフダル山(直訳すると緑山)では、日中40度を軽く超え、植物がほとんど見られない平地とは異なる涼しい高山気候と緑のある景色に癒されるとともに、3000m 近い山の頂上で見られる海生生物の化石など、オマーンの特殊な地質を裏付ける多くの場所を実際に訪れることができ、これらの場所を保全しなければいけないという思いが一層強くなりました。

私の研究の計画では、11 月にフィールドワークでこの地域をもう一度訪れることが決まっています。次回は UAE が主になるのですが、自らの研究を進めると同時に、より深い文化理解を得られるよう努力していきたいと思っています。

以上

▲オマーンのアフダル山からの景色です。右側には、伝統的な農業の様子が見られ、中央と左側にはオフィオライトと呼ばれる、本来は海洋プレートの一部が隆起した世界的に珍しい地層が見られます。

▲仲良くなった語学学校の先生との写真です。この先生とは、これからも一対一の授業でお世話になる予定です。

▲同じくアフダル山における、古代の貝類の化石です。2000m 以上の標高で見られるこの化石は海洋プレートが隆起したこの地域の地層を表すものとなっています。

▲オマーン・ニズワ県にあるトゥファと呼ばれる地形で、泉や鍾乳洞から流れ出した水により、石灰岩と呼ばれる岩が溶け、そのうちの炭酸塩と呼ばれる成分が堆積した地形です。この地形は、年代測定に用いることができ、いつの時代にこの地形がある地域に湧水が流れていたのかを知ることができるものです。